

## 概要

千曲川は埼玉・山梨・長野の3県の境に位置する甲武信ヶ岳の長野県側（南佐久郡川上村）を源流とし、八ヶ岳・関東山地等を源流とする諸河川と合流し佐久・上田盆地を北に流れる。川中島の北端で犀川と合流し、新潟県に入ってから信濃川となる。信濃川は、越後平野に出て新潟市で日本海に注ぐ。その長さは国内河川では最長の367kmにも及ぶ。

源流の甲武信ヶ岳は標高2,475mで奥秩父山塊の中央に位置する。この一帯はジオパーク又は「地質学発祥の地」として近年注目されている。名前は甲斐（山梨）武蔵（埼玉）信濃（長野）の境にある事に由来する。千曲川の他にも荒川・笛吹川（釜無川と合流後は富士川）の水源でもある。日本百名山の一つに数えられる。

今回は、生物地学研究部会の臨地研修として夏季休業を利用し、南佐久郡川上村の毛木平から甲武信ヶ岳登山道に入り、約4kmの行程を半日掛けて千曲川源流迄を踏査した。途中、遊歩道付近の地形・地質・植生等の観察を行った。

平成30年 8月6日（火）

午前10時・晴・26℃

毛木平駐車場に集合し、甲武信ヶ岳登山道に入る。目的地である千曲川源流に向けて4km（5時間）のトレッキングを開始。

## 毛木平から源流を目指して入山



## 遊歩道脇に見られる露頭



出発直後は「遊歩道」の看板通り、川沿いに平坦な道が続く。洪積世に堆積した川上礫層を観察しながら歩く。道が川から離れると少しずつ起伏が激しくなり、登山の様相を呈してきた。

登山道の右手は礫岩・石灰岩・チャート等の堆積岩の露頭が見られる。中生代ジュラ紀後期に堆積した川上層である。

この辺りの水中にはイワナが生息しているらしいが、確認する事は出来なかった。

## 岩屋



## ザトウムシ



出発から約2時間が経過した。正午頃「ナメ滝」に到着、ここで昼食。ナメ滝は“滑滝”の意味である。流水により侵食され、滑らかに磨かれた花崗岩質の岩盤が滝を形成している。

### ナメ滝



### 標高が上がると植生はダケカンバに替わる



### 徐々に川幅が狭まり源流に近づく



### シラビソ原生林の下には水源



### 厚く苔の生い茂る下から水が湧いている



### 標高2,160m「水源地標」にて記念撮影



甲武信ヶ岳の山頂近く、標高2,160m地点のシラビソの原生林の下から細い流れが始まる。そこより上の沢は涸れていて水の流れは見られないことから、ここが千曲川の源流であることが確認される。

登山道の脇には「千曲川・信濃川水源地標」が立つ。山体の大部分を形成する花崗岩が風化した真砂土が堆積し、その中を通り抜けてきた水はミネラルウォーターである。鎖が繋がれたコップが置いてあり、飲用可能であることが分かる。水は清冽で水温は6℃であった。水底の石の下にはプラナリアが生息している。

平成30年 8月 7日（水）

午前 9時・晴・28℃

宿泊した川上村内の温泉旅館「湯沼鉱泉」が管理する「梓鉱山」に許可を得て入山し、鉱物採集を行った。

採集時間は50分程度であったが、ズリ山（鉱屑の山）や崩落した石塊の中から数mm～1cmの小さな水晶が沢山採集された。形の良い物のみを選び、持ち帰った。

梓鉱山は甲武信ヶ岳の麓、梓川上流域に点在した鉱山群で、古くは金峯金山とも呼ばれた。地質学的には中生代ジュラ紀後期（約2億年前）に堆積した川上層群の石灰岩に花崗岩質マグマが貫入し、熱変成作用を起こして生成したホルンフェルスのスカルン鉱床で、多くの露頭が存在する。

戦国時代に甲斐の武田信玄によって開発され、主に柘榴石に伴って産出する金が採掘されていたと伝えられている。1935（昭和10）年の記録では、産出量は鉱石1t当たり4g程度と低く、その後、住友金属鉱山が戦後も採掘を続けたが、1954（昭和29）年頃に休山した。

現在は水晶の産地として知られ、一部の鉱物採集マニアの間では有名である。入山には前述の「湯沼鉱泉」にて手続きが必要である。

私達にとって生活の原点とも言える千曲川の源流を実際に歩いて辿り着き、湧いている水を掬って飲むという貴重な体験をすることが出来た。又、川上村は全国からマニアが集まる鉱物の宝庫。短時間ではあるが実際に鉱物採集を楽しむことも出来た。

#### 梓鉱山（金峯金山）



#### 川上村産水晶「日本式双晶」（湯沼鉱泉蔵）



#### ズリ山から採集された「黒水晶」



#### 黒水晶拡大

